



2003年

SORA 3号

晴夜 (3) | 2

柴田 佐知子

夏ひばり島の畑はすぐ乾き

蛇過ぎし道のしばらく動きをり

大いなる向日葵が声かけてきし

学校へ連れてゆかれし目高かな

子が底に押しつけてをり浮人形

栃の花さびしき鬼が人家まで

夏襟や気儘通して疲れたる

青嵐

小林 朱夏

卑下するは老いることなり青嵐

芭蕉布を紡ぐ芭蕉に囲まれて

夏草の上を大きな風が吹く

口笛を遠くへ運ぶ青芒

濡れてより皮膚となりたる海水着

姿見を幾たびも見る浴衣の子

掌に掬へば色なき水や夏の海 原 石鼎
二十年も昔の沖繩の思い出です。娘二人が二才と四才の時、夫の転勤で沖繩県那覇市に移り四年と少しの間暮らしました。

一月の花見が終わると三月の海開きが待ち遠しくなります。それから九月、十月までの半年間が海水浴のシーズンです。休日ともなればバスに揺られビーチへ出かけます。余談ですが、その頃はバス停に時刻表はありませんでした。なるべく木陰を見つけて、今か今かと待つのです。沖繩では海水浴場のことをビーチと言います。村営・町営・ホテルのプライベート

下駄の緒の食ひ込んでくる遠花火

騒がしき子らに西瓜を切り分ける

蓮の葉の右往左往の日なりけり

思ひ出すやうに鳴りたる貝風鈴

子供らは寝巻となりてまだ泳ぐ

蝸牛見る夢はみな殻の中

客去りし部屋に団扇のあるばかり

青空の端に揺れぬる烏瓜

長々と棚を歪めし糸瓜かな

ビーチ等があり、どこも入場料を払います。ビーチは小さな小さな白い砂で、これはサンゴの粒だと聞いた記憶があります。この遠浅で人もまぼろなビーチで日永一日を過ごすのです。ウチナンチュー（沖縄の人）と、沖縄で暮らしているヤマトンチュー（本土の人）は水着の上に必ずTシャツを着て遊ぶので、オイルを塗って水着姿でいる人達はすぐに観光客と判ります。そろそろお昼です。バーベキューの美味そうな匂いもしてきました。我が家のビーチでのランチは買って来た揚げたての子供の顔位のさつま芋の天ぷらとフライドチキンそしてサーターアンダギー。午後からの娘達の見張りは下戸の夫に頼むことにして、私はオリオンビールを頂きます。

美しい貝やサンゴのかげらを土産に帰ります。次の休日も又その次の休日もビーチへ通い、水着の跡をくつきりと残して新しい年を迎えたものでした。

光 背

十河波津

囀りや白づくしなる部屋に覚め

巢造りの鵲窓に見る日永かな

朝涼や衿を重ねし胸薄く

干されたる病衣に動く五月の陽

初夏やひとつの窓に景ひとつ

レントゲン写真光背に医師涼し



慈悲心鳥臘涙を積む賽の神

平凡に生きて夾竹桃は嫌ひ

教会の裏に罎を張る女郎蜘蛛

山削り墓苑を高く代田水

神籠石罎む山より時鳥

花樗僧も混じりし舟遊び

三伏のはじめや牛の咀嚼音

秋めくや墳の辺に売るきじ車

父の勤めの関係から小学生時代を南台湾に育った。今思うと、のびのびとした楽しい日々であったように思う。

その後日本に戻り父の故郷に帰ったとき、わからない言葉に出会った。いわゆる方言である。しかし良い響きを持つている言葉だと思った。

テレビの街頭インタビューなどで色々な懐かしい言葉が失われつつあることに驚く。

俳句には俳句独特の言葉がある。「古季語と遊ぶ」ではネル・すててこ・脚気・蠅帳などがすでに古季語にあげられている。これらの言葉は凡て生活に生きていたものである。昔は良かったと思うのは線言であろうか。

麦 笛

苑
実
耶

剃刀をあてて得度や桐の花

風道にそひ案内する夏座敷

逃水や疑ふ心すこしづつ

敵多く草矢に指の傷増やす

一昼夜かけて満たせり代田水

麦笛の近づいてくる夕べかな



子育てを終へし父母青簾

縄八本束ねて鵜飼始まれり

竹擦れは囁きに似し梅雨晴れ間

長老の指示を仰ぎし祭かな

機関車の蒸気を浴びし立葵

夫の声聞いてはをらぬ茄子を焼く

塩水に海ほほづきを漬けしまま

灯のともるころに家路や日焼の子

夏負けと言ひしも夫の振り向かず

薬膳料理について話を聞く機会があった。

薬膳というと、漢方薬を使った臭くて高価なものを想像していたが、要は旬のものを食べようということ。夏は胡瓜やトマトなど体を冷やすもの。冬は大根や人参など体を温めるものが旬となる。それに紫蘇や生姜などの薬味を添えて食欲をそそる。

句と言えば、俳句はまさに季節の句を詠む。道の端の小さな花に目をとめ、風の音に耳を傾ける。

庭の隅に茗荷をみつけた。食も俳句も楽しみたいと思う。

銀 漢

高倉恵美子

見るのみの楽しみもあり植木市

バスで来し遍路は先を急ぎけり

祭日のごとく浮立つ田植かな

卯の花の香り増したる薬師仏

母よりも父は年下麦の秋

子雀に太き麦粒こぼしけり



麦藁を括るに膝の力もて

梅漬くる瓶のいろいろ楽しかり

校長も教へ子もぬる溝浚へ

家捨てし女呆けし螢かな

恐ろしき顔して百足虫踏んでをり

もてあます嬰の重さや茄子の花

思ひ切り髪切つてゐる半夏生

跡継ぎがうしろに控へ鵜飼船

銀漢や生きる明日のあることを

機械化が進んだとはいえ、農家にとつて田植は大変な仕事である。前準備の色々な手間はほとんど年寄りがかかる。

本番の田植は土曜が日曜に一日もかからずあつけなく終わってしまう。昔は女手も重要な役割があつたが今は出番もない。

すっかり変わってしまった田植だが、老人達は「手植えの頃の腰の痛さだけは忘れる事はないね」と笑う。

このあたりでは梅雨の頃の風を田植西風と言う。田植が終わったのだからゆつくりすればいいものを、夫は屋敷の手入れに忙しい。